

この文章を書いている間も、2号館の一室で顕微鏡の前に座られ、インロー箱やユニットボックスに満載されたゾウムシ標本に囲まれて研究されている先生のお姿が脳裏に浮かんでくる。先生からは、研究に取り組む姿勢を知らず知らずの内に教わった気がする。また、先生はある年の鞘翅学会で「大学の講義は60点あれば「可」をもらえる。たとえ不完全でも、とにかく（論文を）出すことが大事だ」という意味のことをおっしゃったことがある。勿論、誤りや嘘ばかりの論文を出すことは論外だが、自分の得た知見を論文として発表することで、後の人々が検証し、更に良いものを積み上げられるようにするのは非常に大事である。先生は研究史という大きな流れの中に身を置き、生涯研究者としてそれを実践されていたのではないだろうか。

ちなみに、全国の大部分の高等学校では、30点で単位が認定される（と思う）。私も先生の言葉をやや拡大解釈し、自分の得た知見を、たとえ30点であっても細々とアウトプットし続けていこうと思う。

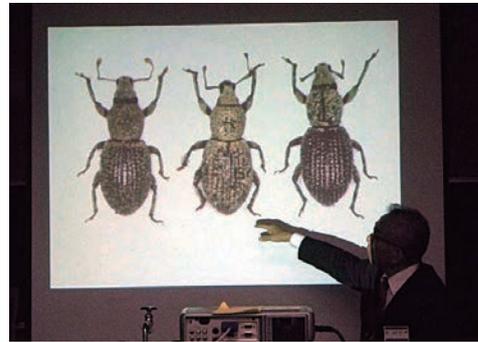


写真1. 2010年の甲虫学会（大阪）
ゾウムシ分科会で発表される森本先生。

森本先生の研究のあしあと

辻 尚道・今田舜介

〒819-0395 福岡市西区元岡744番地 九州大学大学院昆虫学教室

はじめに、今年9月3日に急逝された森本先生のご冥福をお祈りするとともに、そのゾウムシにかけた生涯を傍らで支え続けたご遺族の皆様へ、謹んでお悔やみ申し上げます。

森本先生がご自身の生涯を通して行った研究は、今日の日本の昆虫分類学、応用昆虫学の礎を築くものです。その偉大な業績の数々は到底限られた誌面で語り尽くせるものではございませんが、本稿では、先生の主要な業績のひとつであるゾウムシ上科甲虫の分類学的研究について、僭越ながらその概要をまとめております。

本稿を草するにあたり、多くのご助言をいただいた九州大学総合研究博物館の丸山宗利博士に厚くお礼申し上げます。

生物の分類体系は、クジラを魚ではなく哺乳類の一員とみなすように、外見的な特徴の類似性よりも、互いに相同な形態の比較により類推される系統的なまとまりを重要視した体系を構築することで、その生物の進化過程の研究など、発展的な研究に用いることのできる体系ができると考えられます。森本先生が研究を始めた当初、世界のゾウムシ上科全体の高次分類体系には形態情報の少

ないLacordaire (1863)の体系が1世紀にわたって踏襲されており、解剖と詳細な形態観察に基づく比較形態学を取り入れた分類体系は提唱されていませんでした。また、日本のゾウムシ相はごくわずかな種がそれぞれの科・亜科で断片的に分類が進んでいるのみで、その多様性の理解には到底及ばないものでした。これらの状況から、森本先生のゾウムシ研究は解剖を伴う詳細な形態比較による高次体系の提唱と、日本産ゾウムシ上科のファウナ解明を目的として開始されました。

1962年に出版された森本先生の学位論文、“Comparative morphology and phylogeny of the superfamily Curculionoidea of Japan”では、ゾウムシの体の各部位の形態について、系統関係の推定に重要な脛節先端部の形態や解剖でしか観察できないMetendosterniteやProventriculus、生殖器官の構造に特に注目して、ゾウムシの主要な科や亜科のもつ形態をまとめました。これはその後のゾウムシの分類学に大きく影響を及ぼし、今日でもゾウムシ分類学を学ぶ人であれば誰もが参照する重要な論文となっています。また、森本先生はその後も幼虫の形態や成虫の口器の形態について、指導した学生たちと共にゾウムシ上科全体について

	新族・新亜族	新属・新亜属	新種・新亜種
ヒゲナガゾウムシ科	3	6	52 (54)
オトシブミ科	1		1 (4)
ミツギリゾウムシ科		1	13
チビゾウムシ科			2
オサゾウムシ科		2 (3)	10 (11)
ナガキタイムシ科			(26)
ゾウムシ科			(19)
カギアシゾウムシ亜科		19 (20)	18 (26)
ヒメゾウムシ亜科			(1)
クモゾウムシ亜科	1	4	18 (19)
クイゾウムシ亜科		2	4 (5)
イネゾウムシ亜科		1 (2)	1 (2)
ゾウムシ亜科	1	9 (14)	69 (162)
クチブトゾウムシ亜科	1	10 (20)	195 (229)
ツツゾウムシ亜科		(1)	1 (2)
アナアキゾウムシ亜科	1	13	57 (61)
クチカクシゾウムシ亜科		14	42
合計	8	81 (100)	483 (678)

表. 森本先生が記載された分類群の数(ゾウムシ上科のみ). 数値は主著のみの数を示し、括弧内にて副著を含む総数を示す.

比較形態学的な研究をすすめ、現在のゾウムシ上科の分類体系の構築に大きく寄与しました。森本先生の解剖技術は先生の専売特許のようなもので、当時の海外の研究者は誰も太刀打ちできないほどであったといえます。

比較形態学に基づく高次系統の論文に並び、1970年代を中心に出版された、様々な科・亜科における東洋区の属までの検索表は、世界中の研究者にたびたび参照されています。それまでの論文の多くは、記載だけで図や写真がなく、比較標本の少ない研究者にとっては属の決定さえ困難でした。森本先生は1968年に大英博物館（現：ロンドン自然史博物館）に留学された際に、東洋区周辺から記載された多数の種のタイプ標本を調べ、寝る間を惜しんで撮影やスケッチをされました。帰国後にその成果として、それぞれの属のタイプ種のスケッチとともに、東洋区の属への検索表を次々に公表されました。日本から約700種のゾウムシを記載された森本先生ですが、その研究はこうした先駆的かつ網羅的な分類体系の整備に基づいています。

比較形態学の研究と並行して、日本産ゾウムシの属や種といった下位分類群の記載や再検討をその生涯にわたって続けられました。表と図は、森本先生が記載した分類群の数を調べたものです。ほぼすべての分類群にわたって研究されたこと、また、森本先生の研究に沿って日本産ゾウムシのファウナ解明が進んでいったということが明らか

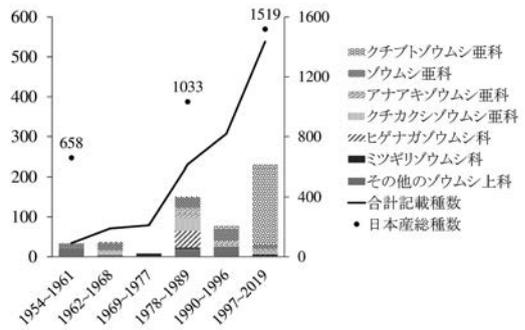


図. 森本先生が記載された日本産ゾウムシ上科の種数の変化。期間は職歴別とした。日本産総種数はそれぞれ森本(1962a, b, c), 平嶋(1989), 鈴木(2019)に基づく。

です。また、ここでは示されていませんが、属の再定義や種の所属の移動、属や種のシノニム処理も分類学上の重要な仕事で、これらも相当量の業績があります。森本先生はその一つ一つに、後世の研究者が混乱しないように解説やスケッチを付し、丁寧かつ迅速に、日本のゾウムシ相の全解明に向けて研究を進められました。

森本先生が亡くなる寸前まで研究をされていたクイゾウムシ亜科には、まだ100種以上の種が追加される見込みがあったそうです。われわれ遺された者ができることは、森本先生の目標であった日本のゾウムシ相をまとめ上げ、害虫防除への応用や進化過程の考察について、あらゆる角度から研究を深めることだと思います。先生が愛したゾウムシは、我々が愛するゾウムシでもあるのですから。

引用文献

平嶋義宏監修, 1989. 日本産昆虫総目録. 九州大学農学部昆虫学教室, 福岡, 1767 pp.

Lacordaire, J. T., 1863. Histoire naturelle des insectes. Genera des coléoptères ou exposé méthodique et critique de tous les genres proposés jusqu'ici dans cet ordre d'insectes. Tome sixième. Paris: Roret, 637 pp.

Morimoro, K., 1962. Comparative morphology and phylogeny of the superfamily Curculionioidea of Japan (Comparative morphology, phylogeny and systematics of the superfamily Curculionioidea of Japan. I). Journal of the Faculty of Agriculture Kyushu University 11: 331-373.

森本 桂, 1962a. 日本産ヒゲナガゾウムシ科、オトシブミ科及びミツギリゾウムシ科目録. 九州大学農学部学藝雑誌, 19 (2) : 159-181.

森本 桂, 1962b. 日本産ゾウムシ科目録 (I). 九州大学農学部学藝雑誌, 19 (2) : 183-217.

森本 桂, 1962c. 日本産ゾウムシ科 (II) とオサゾウムシ科目録. 九州大学農学部学藝雑誌, 19 (3) : 341-368.

鈴木 茂, 2019. 日本列島の甲虫全種目録 (2019年). <https://japanesebeetles.jimdo.com/> (2019年11月8日アクセス).